

川越淳二先生を偲ぶ

牧野由朗（愛知大学）

一月二十四日の早朝、朝寝坊のわが家の電話がけたたましく鳴った。受話器をとると、奥さんから「今朝三時過ぎに川越がなくなりました」との訃報があった。一瞬血の引くような思いで、とり急ぎ薄暗い凍てつくような街中へ車を駆ってお訪ねした。奥様はただ呆然とおひとりで座つておられ、先生は端正なお顔で眠つて居られた。お子様もご親族の方も誰ひとり間に合わない急逝であった。四十年間、教室生活をともにしてきた私は、先生におかけする言葉がでなかつた。

先生は、昭和五十年頃に一過性の脳血管栓を煩わられたが、ことのほか健康には留意されており、六十三年に愛知大学を定年退職されながらは、三浦半島油壺で療養生活を送つておられた。一昨年、大部分が恢復されて、再び住みなれた豊橋へ帰られ、定期的な病院通いの生活を送つておられた。お亡くなりになる前日もお元気に何時も通りワープロを打つておられたが、夕刻から急に苦しみ出され、急拠病院に運びこまれたまま午前三時三十分に逝去された。胸部大動脈破裂、享年七十四才。

告別式に友人代表として弔問いただいた松本通晴先生が、その弔辞の中で「先生に『開拓者』という三文字をお贈りするのがふさわしい」と述べられたが、文字通り先生は戦後の日本社会学の開拓者のひとりであった。そのことは先生がご自身も意識しておられ、

「むら研究会会報」（一九八五年）に次のように書かれている。

「生来、新しいものに飛びつき易く、しかも十分マスターしないうちに飽きてしまうという悪い癖があるようだ。困ったことだと思うがどうにもならない」と。それを自らの反省材料のひとつとしておられたが、その背景には、ややもすれば、研究者の眼が後ろ向きについていることに飽きたらず、実証科学としての社会学の発展のために、常に方法論を模索していたことによると思われる。そのことはまた、前掲会報の中で、ご自分の若い頃の一研究事例を取り上げて「調査目的の不明瞭な調査がいかに無意味に終わるかのよい事例の典型」というべきものと述べられている。その頃、先生は私に「ボクは農漁村を、都市を、そして家族を研究テーマにしているが、それらを解説するには方法論が問題だ。極言すれば、現在のボクは地域社会を対象に、研究方法の妥当性を検証していると言つてもよい」といわれたことからも明らかである。

川越先生は昭和十八年に早稲田大学を卒業されたが、社会学が大学で完全な市民権を得ていなかつた戦前に卒業された先生方の世代の研究者は、多かれ少なかれ、屈折した戦中・戦後を送らなければならなかつた。

先生は、昭和二十一年に主に海外からの引揚げ者が中心になつて、建学の精神だけあって経済的には無一物から出発した愛知大学に奉職されたが、当時、大学には社会学の書物などある筈がなかつた。昭和二十四年に秋葉隆先生をお迎えして社会学科が設立されたが、十分な研究基盤もない苦難の中で、先生はその年の日本社会学会で「輪中地域の同族団」と題する研究報告を行い、一躍若手研究者として脚光を浴びた。

戦後の日本社会学は「農村の民主化」の課題の下に農村社会学が主流を占めていたが、調査方法や技術などは文字通り試行錯誤であったことは容易に想像できる。そんな経験が先生をして前述したような方法論へのこだわりを終生持たせたのであろう。

そんな折、昭和二十七年十二月に有賀先生を中心にして「假稱村落社会研究會」が設立されたが、先生はその発起人のひとりとして名を連ねている。当時三十四才という年少であった。それだけに「村研」は、先生にとって学問研究のふるさとであり、恋びと同時に違いない。

いえやむらの解体が問われて久しい。村研発起人として名を連ねた先生方も、川越さんを含めてすでに十三名の方々が幽明境を異にされた。四十余年の歴史を経たのである。現在「村研」には村研特有の学問的財産があり、昔と変わらぬ恵まれた人間関係がある。またそれが織りなしてきた輝かしい業績と学問的熱氣がある。その伝統を現実に即して灯し続づけなければならない義務が残された会員にはあると思われる。

川越先生を偲びご冥福をお祈りする。